

1 研究主題

つながる保育（1年次） ～ 園と園のつながりをつくる ～

2 研究主題「つながる保育」について

子どもたちが今生きている社会は、AIなどの先端技術の導入、新型コロナウイルスによる「ニューノーマル」と称されるような新たな生活様式により、変化がはやく先の見通せない社会である。幼児教育においては、このような様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるようにするための基礎を培うことが求められる。

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（2022）では、2020年代を通じて実現すべき教育の姿として、多様な子どもたちを誰一人残すことなく育成し、多様な個性を最大限生かすため、「個別最適な学び」と「協同的な学び」の一体的な学びの充実による質の高い学びの実現に向けた取組を進めていくことを提言している。幼児教育段階においては、遊びを通して総合的に幼児の育ちを支えること、幼稚園・保育園・認定こども園といった施設類型や、地域や家庭の環境に関わらず、全ての子どもに格差なく質の高い学びを保証することが重要である。一方で、「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」（2022）では学校種や施設類型を超えた相互理解、連携・協働や、幼児教育の質に関する社会的な認識の共有がされているとは言い難い現状を指摘している。小学校入学時点ですでに学びの格差が生じていること、幼児教育がいわゆる小学校の前倒しのような早期教育と捉えられていることから、幼児教育の質のさらなる向上と、その認識の共有が欠かせない考える。

本園の前年度までの研究「子どもを支える保育ー評価を通してー」では、評価の4つの取組に基づき、暗黙知とされてきたことを言語化することを通して、保育の質の向上や認識の共有につながったという手応えを得た。一方で、秋田喜代美（2023）は、「幼保小の架け橋プログラムの始まりにおいても、地域において私立や民営の幼稚園や保育所、子ども園をつなぐ役割が国公立の園には求められています。（中略）これからは、同僚や園だけではなく、多様な子どもから、異なる施設や校種からも心を開き学べることが求められます。その中で日本の幼児教育のよさを発信し、園や保育者の独自性と卓越性を活かした協働が一層求められるでしょう」と述べている。今後求められる保育の質の向上は、保育観を共有している職員との語り合いや保育の評価にとどまらず、違う文化的な背景や価値観にふれることで、保育に対する見方・考え方を更新していくことが必要であると捉えられる。文化的な背景や価値観を交流することでその変容を自覚し、交流することの意義を実感することができれば、相互に保育の質を高め合う関係を構築していけると考える。このような双方向の関係性の構築が、秋田（2023）における「つなぐ」ということであり、地域において国公立の園が担うべき役割でもある。

そこで、子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性を「つながる」とし、研究テーマを「つながる保育」と設定した。本園が他園や他校種とつながることで、本園の保育の質のさらなる向上と、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指し、地域における国公立の園の果たす役割について検討していく。

3 研究計画と研究の内容

第1年次（令和5年度）

- ・幼稚園・保育園・認定こども園と本園がつながることを試みながら、本園の保育を問い直す。
- ・幼稚園・保育園・認定こども園と本園がつながるための、仕組みやプロセスを探る。

第2年次以降（令和6年度以降）

- ・1年次での研究成果を基に、幼稚園・保育園・認定こども園がつながるための仕組みやプロセスを整える。
- ・幼稚園・保育園・認定こども園に加え、他校種とつながることを試みる。
- ・つなぐ役割を担う国公立の園の在り方を検討する。

4 第1年次研究副題 ～園と園のつながりをつくる～ について

これまで本園では幼児教育研究会を開催することにより、本園の幼児の姿を基に語り合い、保育に対する見方・考え方を交流してきた。一方で、秋田（2023）が指摘するように、本園の幼児だけでなく、他園の幼児の姿についても語り合うような双方向の交流や、長期的な幼児の育ちや保育に対する見方・考え方の変容を継続的に語り合う交流が、本園の保育の質の向上とその質にかかわる理解を共に共有するきっかけとなると考える。そのような継続的で双方向的なつながりをつくるためには、どのようなプロセスや仕組みがあるとよいか、模索していく必要がある。

そのために第1年次の研究副題を「～園と園のつながりをつくる～」とし、幼稚園・保育園・認定こども園の職員とつながることを試みる。本園がこれまでに追求してきた「遊び込む子ども」の姿、「子どもを支える保育ー評価を通してー」において構築してきた評価のサイクルを基盤としながら、交流を通して保育を更新したり、園と園がつながることのよさを実感したりすることができるような関係性をいかに構築していくかを探っていく。

5 研究方法（第1年次）

（1）多様な交流の実施

他園が実施する園内研修への参加、語り合いの場の実施、研修のコーディネート、共同で保育を行う場の設定、カンファレンスの公開など、他園と調整を図りながら多様な交流の場を設定する。幼稚園・保育園・認定こども園と本園とのつながりをどのようにするのか、交流の事例を蓄積することを通して、そのプロセスを探る手立てとする。

（2）保育に対する見方・考え方の言語化

交流によって保育に対する見方・考え方をどのように更新したのか、振り返りやカンファレンスなどを実施することにより言語化していく。書くことや語るることにより、保育に対する見方・考え方の変容を自覚するとともに、どのように交流することが園と園のつながりをつくるのかを探る手掛かりとしたい。

（3）情報を共有する方法の実施と振り返り

本園の保育の評価の取組の一つである「のびのび保育シート」を活用する、交流後の実感を綴ったレポート（お便り）を書いてフィードバックする、HPやチラシを通して園と園がつながるよさを実感したことを発信するなど、幼稚園・保育園・認定こども園と双方向に、継続的に交流するための仕組みをつくる。実施後には、その方法が適切であったか振り返りながら、情報を共有する仕組みを更新していく。

（４）大学や研究協力園との連携

本学教員からの指導・助言を受けながら研究を進めていく。また、本学の大学生、大学院生に、交流にかかわる発話記録とその分析を依頼する。交流によって保育をどのように更新したのか、より客観的な視点から読み取る一助としたい。

交流を終えた後には、その交流にどのような価値があったかについて、研究協力園から評価してもらうことを依頼する。園と園の「つながり」を広い文脈で考える手立てとしたい。

【引用文献】

- | | |
|-------|---|
| 文部科学省 | 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）（中教審第 228 号）2021 年 |
| 文部科学省 | 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会における審議経過報告 2022 年 |
| 秋田喜代美 | 「これからの国公立幼稚園・こども園に期待すること」幼児教育じほう（第 51 巻）p35
2023 |